

最後の高木兼寛

吉本隆明の作品に「最後の親鸞」というのがある。念仏僧・親鸞が最後に辿り着いた（仏についての）想念を描いたものである。こまかい内容については憶えていないが、強い感銘をうけた。いつか、高木兼寛の最後（辿り着いた心境）について書くことがあったら、その題名は「最後の高木兼寛」にしようとひそかに決めていた。別に深い意味があつてのことではない。

晩年の親鸞（1173-1262）は、毎日が念仏の生活であり、仏への感謝の毎日であつたらしい。臨終の様子も、九十歳近い老齡の所為もあつたが、「絶えまない念仏の声が消えたとき、息も静かに絶えた」と伝えられている。しかし、その頃の親鸞を取りまく家庭的、社会的状況は決してこのような平穩なものではなかった。関東での布教は一応成功したものの、故あつて妻子とは別居生活をせねばならず、そのうえ生涯をかけてつくった関東の教団も信頼した長男・善鸞の異義によって壊滅的打撃を受けつつあつた。この善鸞事件は親鸞の人生の存在意義までも問われる深刻な事件であつた。仏教の戒を破って肉食妻帯し、子供までもうけた罰といえばそれまでだが、自分の人生を否定するような善鸞に対して、彼は老残の身の力をふりしぼって「善鸞は父を殺すなり……今は親ということあるべからず、子とおもうこと思い切りたり……悲しきことなり」と書き送っている。すなわちこの手紙によって長男を義絶（勘当）したのである。そしてふたたび二人は会うことはなかった。

筆者はこの善鸞への義絶状を読みながら、九十歳近い親鸞を訪れた深い悲しみを想像する。そしてその想像はいつのまにか晩年の高木兼寛（1849-1920）を襲った深い悲しみの思いに代わっていくことがある。高木の場合も最晩年になって、絶大な期待をかけていた二人の子息がほとんど同時に不意打ちのように奪い去られた。神も仏

もないような不条理な仕打ちにじっと耐えるしかなかった二人の心境が、(性格、生い立ちなど二人にはまったく共通点がないにも係わらず) どこか似ているように思えるのである。

百尺竿頭進一步(百尺の竿の先で、さらに一步のぼってみよ)

明治42年(1909)、高木は慈恵医専の卒業アルバム巻頭の毛筆で黒ぐろと「百尺竿頭進一步」と書いている。仏道を学ぶ者は身も心も投げ捨てて、ひたすら仏の教えの中に入らねばならぬ、という仏教の教えである。百尺もある高い竿の先までのぼって、さらに一步を進めれば、手足が放れて墜死すること必定である。手足を放すどころか一層つよく竿にしがみつきたくなるのが人情であり、煩悩である。しかしこの執拗な煩悩のしがらみを断ち切るには、どうしても竿の先から思い切って手足を放すほどの覚悟と勇気が必要なのだ、と云うのである。この言葉は、一つには卒業する学生に与えたかったのであろうが、もう一つは自分自身に強く言い聞かせたかったのではないだろうか。その意味では、この言葉はそれまでに高木が到達した宗教的境地を示すものとして大変貴重である。

しかし高木が初めて宗教に強い関心を示したのは仏教ではなく、むしろキリスト教であった。英国に留学中のことである。彼はそこでキリスト教に接し、それに強い影響をうけた。帰国(明治13年暮れ)後、彼が興した事業の大半はそこでの宗教的思想に依るといってよいほどである。はじめ高木は宗教などには殆ど無関心で英国に渡り、ひたすら医学・医術のみを勉強しようとしていた。しかし偶然のことからキリスト教に接することになり、はじめは科学万能主義者としてこの宗教を無視していたのであるが、誘われて教会に毎日曜に通っているうちに、この宗教が西欧文化のすべての基礎になっていることに気がつくのである。そして帰国してからはこのキリスト教の思想によって施療病院、看護婦学校、医学校(慈恵医専、慈恵医大の前身)などを次々とつくっていった。

彼は慈恵医専の学生を前に、英国での体験を次のように語っている。

「英国に参って第一番に迷惑を致したことは日本の事柄を我等何も知らなかったことである。即ち日本の歴史を心得て居らなかったのは非常な遺憾でありました、なかんずく信仰の問題であります。外国の人が懇意になりますとお前の信仰して居るものは何かと斯う尋ねる、ところが自分は神道を信ずるとも能う言わず、仏教を信ずるとも能う言わず、儒道を信ずるとも能う言わず、兎角判然とした応えが出来ないのであります。其中にデニソンと云う年老いた方が在って、お前は土曜日に拙宅へ御出でなさい、さすれば自分がバイブル即ち新旧約聖書を共に読んで見ようと云うことであります。それは誠に有り難い、内心はどんな考えを持って居ったかと云うと是れは英語の稽古に大変都合が宜しい、月謝も払わずにできるから誠に好都合であると云うような軽薄な考えを以て此の親切に接した訳であった。然る処が今度は日曜になると寺(教会)に同行しようと云われ、それも亦味わうが宜しいと思ってそれじゃ願いましょうと云った……併し六か月の間は此の方の話が深く私の耳に逆うてならぬ、どうも理屈が合わぬ、自分は科学的万能の考えで居るからとても神秘的の御話は耳に逆らうて会得が出来なかったのであります。そして六か月の間彼此抗弁を試みたが漸くにして成る程此の五尺の身体に宿って居る所の頭脳は誠に小さいもので宇宙を知るなどと云うことは無論不可能のことである、いわんや先輩の大家は遙かに優れた人である、其の方々の言いなさること、信仰なさることを此の凡夫の吾々が言うのは間違いである云う觀念が自ら分かってきた……それと同時に英国に於ける総ての思想、即ち宗教を基礎とせる施設に直接接して、成る程是れでなければならぬと云う心持が十分に起ってきたのであります。其の儘日本に帰ってきた、どうしても是れは宜い、斯うでなければならぬと云う觀念が有ったから其の後慈恵医院を建てる時に此の思想に依って貧乏な人民を救済せんと欲した……それから医学を以て十分に人の病気を治しこれを療するに付いては看護婦の必要がある、是れも作らねばならぬ、是に於いて看護婦養成と云うことに着手した。また病人が出来ても一に看護二に医師と云う位医師の業も大切であるから医師を養成せねばならぬ、依って又一方に医学校と云うものを作ったのである。此の三つが揃えば先ず我が同胞の疾病を救済することが出来ると

深く信ずることが出来た、故に之れを計ったのであります。ここらは全く右デニソンと云う方の親切が自分をして斯くの如き境遇に至らしむることになったのであります。それを思えばそれ丈けを以て見ても宗教の施設と云うものが社会にどれだけ益を及ぼすかと云うことは御了解が出来ると思えます。諸君の今日学んで居りなさるこの学校、医院と云うものは他に日本にはありませぬ、是れが本校の基礎が宗教の念の下に立って居ると云うことのある所以であります」。

このように高木は医療事業の根本にはっきりキリスト教の人道主義を置いたわけであるが、しかし、不思議なことに彼はそれ以上この宗教に接近することはなかった。個人的な信仰の問題になると彼はむしろ日本古来の仏教に接近していった。これはおそらく上の体験談で「神秘的な御話」と云っているような神話的部分（“天地創造”とか“処女降誕”、“復活”といった部分？）が彼の趣意に合わなかったためではないかと思われる。神についての考えにしても、彼には神をキリスト教のように“人格的で対象化された個”としてはどうしても捉えにくかったのではないだろうか。自分の外にあり、自分と向かいあっているような神は、当時の科学万能の時代に生きようとする高木には、やはり“神話の神さま”としか映らなかったように思われる。

明治36年（1903）、高木は慈恵医専のなかに「明徳会」なる精神修養の会を開いた。この会は大正9年まで約17年間続いた。毎月一回講演会をひらき、教師、学生全員が出席して聴講するということであった。幹事が仏教者の樋口繁次（教授）であったため、仏教を中心とした精神修養の話がほとんどであり、高木はここでこの仏教から強い影響を受けることになった。そして精神修養とは、つまるところ煩惱との戦いであり、欲望との戦いであることを知った。いまの「百尺竿頭進一步」にしてもそこで学んだ座右の銘ではなかったかと思われる。

明治20年（1887）ころから日本では開業医の全盛時代が始まるといわれ、大きい病院が次々とつくられていった。また医学の教育面では東京大学が全国を支配しつつあり、いわゆる学閥が形成されていった。しかしこのような状況の中で、当時の高木の仕事といえば施療病院という一種のボランティア

活動であり、また医学校による医師の養成とはいっても外から見れば貧しい乙種医学校（甲種医学校と違い卒業しても国家試験に合格しないと医師になれない医学校）にしか過ぎなかった。帰国後、宗教的理想主義に燃えて、続けてきた医療事業ではあったが、世俗的な意味では何度か悔しい思いをしたに違いない。「百尺竿頭進一步」はその都度自分に言い聞かせた言葉であったのではないだろうか。名誉欲、営利欲をたち切ってそのまま進めと。

仏教では、欲望の中で名誉欲が一番始末が悪いと教える。この「百尺竿頭進一步」を卒業生にあたえた明治40年ころの高木を悩ませた欲望の一つもやはり名誉欲だったのではないだろうか。

彼は、脚気を撲滅した業績のため海軍では高い評価を受けていたが、海軍以外のところでは学閥のため国家的組織の外、つまり官僚組織の外でしか活躍することができなかった。留学から帰ってから盛んに報告していた衛生普及に関する論文も大正に入ってからこれを止め、むしろ国民の体位向上のためのどき回り（講演）に出掛けていった。これなどは衛生学者としての高木の意見が行政の中に取り入れられなかったためではないだろうか。

このことと無関係でないと思われるものに論功行賞があった。明治憲法下の上流階級にあつては、宮中席次における友人同僚との席次の争いもその欲望の一つであったといわれる。日露戦争終了後（明治38年）、実吉安純、石黒忠恵、橋本綱常ら高木の同輩後輩らが揃って子爵を賜わったのに、彼は男爵を賜わったに過ぎなかった。そのこともあって宮中席次では高木はかつての同輩後輩よりずっと下位であった（高木と親しかった東郷平八郎などはいつもこのことを気にしていたという）。

明治という時代から考えて、高木も立身栄達にそれ程でんたんではなかった筈である。しかし「百尺竿頭進一步」を座右の銘にしたこの頃から、もうそろそろこのような泥々した問題からは早く卒業したかったのではないだろうか。

雪竹たたくも慈悲のころかな

高木は大正初めの明德会で次のような仏教概論に類する講演をしている。

「宇宙の万物はことごとく物質によって構成されている。我等人間を構成しているところの酸素、水素、窒素、炭素というものは、この白墨をつくるところのもの、この机をつくるところのものと少しも違うところがない、すなわち万物は同質同体である。然るに宇宙の現象中人間のみが万物の霊長という楽しみある形になっておる。かくの如く楽しみある形になることは中々以て容易なことではない。故に人身受け難し、人の形になることは中々難しいというのである。然るに幸にしてこれを受けることが出来た、どういう訳で我等はかくの如き楽しみある人間に生まれることが出来たのか、どういう訳で我等は此処に生きているのか、そして何処へいくのか、我等は生まれてこの方雑多なことに遭遇せざるを得ぬが、これには一体どういう訳(意味)があるのか。これらの説明を聞くことは誠に難しい、そこで仏法聞き難し、中々容易に聞くことはできぬ、とこう云うのである。

そこで我等人間本来の訳(意味)を聞くにはどうしたらよいのか、どうしたら出来るのか。それにはまず第一に、宇宙の真理すなわち仏法に帰依することである。高木校長(自分)が常々服膺している事である。我等はその仏法を尋ねなければならぬ、会得しなければならぬ、それに依らなければならぬ、と云うことである」(明德会講話)。

仏教の基本を整理し切ってしまうと、宇宙は「無」であるとともに生命という一つの体系である、ということになる(それ以上云えば宗派の違いになる)。仏教では認識の対象になるような仏(神)をもうけず、逆にそれによって認識が可能になるような何かを「仏」と称する。この仏は認識の対象とはなりえず、また言語で表現もできず、したがって「無」と呼ぶしかないというのである。むしろすべての存在を支える根底としてとらえるしかない、あるいは主観も客観も一緒にして支えている「何か」としてとらえるしかないというのである。

したがって我々人間を構成している身心(肉体・精神)にも、さだまった

実体がない、要するに無我である。さらに云うならば、客観的に無我であるなら、同時に主観的にも無我であるはずである。煩惱といわれる色々の欲望もしたがって根拠がない、本体がない、そのようなものに囚われてはならないということになる。精神修養とは欲望との戦いであり、神聖なる「無」に目覚めることであり、この目覚めた状態を「悟り」という。

自分をふくめて一輪の花も、一匹の動物も、すべて完結した個というものではなく、それぞれが大自然の生命の海に浮かんでいる一つの状態に過ぎない。生命の海から湧いてくる「無」という力によって生かされているに過ぎない。このことに早く目覚め、我執・欲望から離れて、この「無」にしたがって生きねばならない、悟らねばならないというのである。

このあたりになるとどの宗教も同じような表現になるらしい。「この生死(自分のいのち)はすなわち仏のいのちなり……我が身をもこころも放ちわすれて仏のいえに投げいれて、仏のかたより行われて、これに従いもて行くとき、力もいれず、心も費やさずして、生死を離れ仏となる」(道元)、「仏もなく我もなく、まして此内に兎角の道理もなし。善悪の境界、皆浄土なり。外に求むべからず、厭うべからず」(一遍)、「もはや生きているのは私ではない。私は死んで、私のうちにキリストが活きている」(パウロ)などみな同じことを云っているように思われる。

明治43年(1910)秋、高木の妻・富子は腎盂炎を患い、続いて今度は高木自身が肝炎、胆嚢炎を患った。いずれも大患であったため半年以上も静養せざるをえなかった。この静養の間に、高木は病の苦しみのみならず、老いの苦しみ哀しみをも味あうことになった(もう62歳であった)。もうそろそろ死をみつめ、死について考えねばならない、そしてなによりも早く安心立命の境地に到達せねばならないと思った。いままで長い時間をかけ懸命に精神修養に努めてきたが、まだまだ前途遼遠であった。心機一転して何か新しい方法で悟りの境地に到達することはできないものかと迷いはじめた。その頃(大正4年(1915)1月)、樋口繁次に嫁いでいた一人娘・寛子が世を去った。このことがいっそう高木に無常を想わせ、焦らせることになった。神道(禊の行)に接近するのはその頃である。

ある宗教的境地に到達するには、知識をいかに蓄積してもそれは難しいといわれる。そして、それまでの世界を脱却するには、どうしても“行”が必要であり、しかも尊敬できる師について行ずることが好ましいといわれる。高木にも今までのような高僧の話聞き、宗教書を読むだけではなかなか困難であることが分かってきた。彼は古典研究会(古事記、日本書紀、禊祓などの研究会)の師・川面凡児にしたがって禊の行に入ることを決心した(大正4年夏から)。この禊の行というのは、絶食にちかい粗食をとりながら、また冷水に身体を浸しながら、はげしい運動をくり返すという行であって、行を進めるにつれて心身の統一、神我一体の悟りの境地に到達できるというのであった。

神道といえば仏教からずいぶん異質のように思われがちであるが、ここでもその本質を整理しきってしまうと、大変仏教に似ているといわれる。神道では、万物は“葦芽(あしかび)の萌え勝(あが)るごとくなる”ものによって支えられているというが、これなどは上述の“万物は神聖なる「無」によって支えられている”という仏教の考えに非常に近いものである。

高木は、病軀老軀に鞭打ってこの激しい行に入ってしまった。そしてようやく心身の統一、神我一体の悟りの境地に到達することができたのである。その境地について彼はつぎのように述べている。

「禊によって精神統一上得る所はどうかと云へば誠に好成績と云はなければならぬ、何となれば雑念が減じてくる、そして遂に全く消滅に帰する、そこで精神統一が出来る、精神統一が出来るとここに一種の自覚性が起こってくる、その自覚性では何を見るかという物の本質が見えてくる。これを名ずけて心の眼が開く、心眼が開けると云うのである……蓋し基督の如き方も此処に達せられたから宇宙の真理を知ることが出来た、此境に入ってから始めて心身の調和統一と云うことが出来る、是が安心立命の基礎である、之れを知るに非ざれば身は修まらぬ。心身統一、信仰の極意に至れば宇宙と通ずる、即ち至誠神に通ずる、我と神と通ずると云う極点に達する、之れに依って心身

の統一が出来るのであります。ここに申した通り神道でも儒道でも仏道でもそれは出来るのである、信仰が極点に至ればそれが出来る……心と身を清らかにして居れば自ずから往くべき所に往くことになる、そこで蔽ひ清めると云うことが一番大切なことになってくるのであります」(明德会講話)

その頃(大正7,8年頃)、高木がよく口にした言葉に、「雪竹たたくも慈悲のころかな」と云うのがある。積もった雪が竹の上に落ち、その重みで竹がしなるのも、けっきょくは神仏の慈悲心のあらわれなののだといったところか。この言葉には、一遍の「よろづ生きとし生けるもの、山河草木、ふく風たつ浪の音までも、念仏ならずということなし」や、道元の「正修行のとき、溪声溪色、山色山声、ともに八万四千偈(説法)をおしまざるなり(わが身を惜しまず修行するとき、山水もまた真実の仏の姿を示すことを惜しまない)」に共通する境地があるように思われる。聖なる「無」の息吹きを妨げる我執、エゴイズムを成敗して、この息吹きを素直に聴こうとすれば、生きとし生けるものの総ての声(神仏の声)が聞こえてくると云うのである。

高木の最晩年の一日の生活は、自分を支えているものの総てに感謝することから始まったといわれる。毎朝、神棚のまえで祝詞を時間をかけて上げ、仏壇のまえでも丁寧にお祈りし、さらに食事の前には、必ず百姓のブロンズ像に麦飯を捧げ、感謝の合掌をしてから戴くといった具合であった。そしてこのような感謝の生活は自分のみならず、友人知己にも極力これを要求した。例えば、物を粗末にする学生をみつけた時などは非常に怒り、「もっと丁寧にあってこそ、その物にたいする報恩感謝の気持ちをあらわす道である」と懇々と諭したといわれる。そこには、人との出会いのみならず、山川草木すべてとの出会いにたいして感謝している姿があった。

「高木はもう駄目だ」

大正8年(1909)は、古希を過ぎたばかりの高木にとって思いがけない大厄年であった。その年の1月、高木のもとにニューヨークから三男・舜三の死が知らされた。舜三は三井の商社マンとしてニューヨークに滞在していたが、当時の経済界の混乱のためノイローゼとなり、その治療中の交通事故で

あった。

その悲しみが癒えない4月に入って、今度は次男・兼二（慈恵医専教授）が腸チフスに感染し、懸命の治療の甲斐もなく、たった2週間の療養で息を引き取った。兼二のばあいは、隣に住んでいたため、高木は病気の療養に当たるとともに経過の一部始終を見ていた。40度以上の持続する高熱、全身にひろがるロゼオラ、予後の悪い前兆の腸出血など、症状が現れるたびに高木はただただ早くその症状が消え去ることを神仏に祈った。それまでの高木は、神仏との会話はただ感謝することであり、願い事の対象にしたことはなかったが、この度ばかりは息子の治癒を神仏に願い、祈るばかりであった。

このような切なる願いにもかかわらず、兼二は穿孔性腹膜炎を併発して世を去った（5月3日）。二人の息子を同時に失った老夫婦はただ呆然とするばかりであった。さらに追い討ちをかけるように医学校、病院の運営で高木の右腕として働いていた義弟・瀬脇寿雄（富子夫人の実弟、慈恵医専教授）が7月に病没した。自分たちの家庭が何者かに呪われているのではないかとさえ思われた（事実そのような噂がさかんに飛び交った）。富子夫人の悲嘆は一方でなく、高木はこの夫人を慰藉するために景勝地・日光を訪れ、そこで二人で静養することにした。しかし高木は、自分の悲しみを抑えながらの慰藉であったためか、却って心身を壊してしまった。抑鬱状態になり、食欲を失い、そのうえ持病のリューマチを増悪させて、こんどは夫人に伴われて大磯の別荘で療養することになってしまった（6月3日）。

大磯での高木の生活は、誰とも面会せず、言葉を発することもなく、ただただ終日籐椅子にぼんやり座っているばかりであったといわれる（あの激しく動きまわった面影はもうどこにもなかった）。しばらくして禊の師・川面凡児が高木を見舞ったときの情景がのこっている。

「何人も見舞いに来るを謝絶すとのことなれば、せめて門前までも参りて密かに令夫人にのみ面会し、直ちにお暇せんとすれば、大人（高木のこと）庭園に姥母車にて歩きつつあり、私の訪れを聞きたれば是非面会あれとのことにて庭園に至れば、以前に変わる御疲労の態、覚えず暗涙胸迫りたのです。大人、思わず私の手を取り『高木はもう駄目だ』と涙とともに述べられて……

云々」。

このとき高木は、(リューマチのせいでもあっただろうが)すっかり弱ってしまった身体を乳母車で支えながら、足を引きずりながら歩いてきた。そして川面の顔を見るなり「高木はもう駄目だ」といって泣いたというのである。高木の落胆、悲嘆の深さが察せられる。

腎炎、尿毒症などがさらに加わり危険な状態もあったが、大磯と東京病院(高木の病院)を何度か往復しているうちにようやく小康が訪れた。そして家族の止めるのも肯かずに夫人の看護のもとに宮崎神宮の例祭(10月26日)に参列するところまでになった(宮崎神宮は高木が中心になって拡大・造営した社であった)。不条理ともいえる運命の悪戯によりやうく耐えることができたのである。

高木はようやく自分が遭遇した不幸について静かに考えられるようになった。神仏に息子の治癒を祈り、また息子を失った不運を呪い、苦しんだのはいったい何だったのか。落ち着いてみると、あのとき祈り、苦しんだのはたしかに自分であったわけだが、ひょっとしたら自分だけではなく、自分の中の神仏も一緒に祈り、苦しんだのではなかったのか、悩み苦しんでいたのは自分であると同時に神仏であったのではないのか、何となくそのような気がしてきた(彼は最後まで“神も仏も存在しない、人生は無意味だ”といった虚無的な考えには近づかなかった)。

今までは、何事も自分が中心になって引っ張っていかねばならない、何か責任感のようなものを感じてきたが、これからは自分と一つである神仏の信念に素直に従って生きたいと思った。かつて学んだ「この生死(自分のいのち)はすなわち仏のいのちなり、……我が身をもこころも放ちわすれて仏のいのちに投げいれて、仏のかたより行われて、これに従いもて行くとき、力もいれず、生死を離れ仏となる」という言葉が心底から分かったような気がした。

そのころ高木は、川面凡児に自分の希望を次のように語っている。

「神仏の信念は、宇宙を貫徹する真正の光であり力であると思う。これからは、この信念に随順していきたい、そして何とかもう一度国家のために尽くしたい」と。彼の内なる神はもう一度国家のために尽くすことを願ったので

あろうか。

しかしこの高木の希望は結局かなえられなかった。翌大正9年(1920)3月21日腎炎が再発し、4月12日には脳溢血症状が現れ、再起することなく、ついに4月13日に逝去した。二人の子息を失ってから一年後のことであった。

葬儀の記録には「霊柩は一路肅々として青山斎場に向かう。此の日天晴れ風吹き、路傍の桜花粉々として飛散し、人をして哀悼の情を堪えざらしむ」と残されている。桜花の散るころだったのである。

そう云えばむかし彼は大和魂について「大和魂は桜花の散り際の如く淡泊でなければならぬ」と力説したことがあった。

臨終の床にあって高木が最後にいただいた神仏の像は、どのようなものであったのだろうか、最も知りたい問題である。

(人情もろかった高木の性質から考えて)子息が重病にかかり、神仏にすがり、治癒を祈ったところから、高木の神仏の姿は少しずつ変わっていったのではないか、と想像する。それまでの神仏は‘宇宙を貫いている原理とか法’とかいった、どちらかといえば透明でクールなものであったが、それ以後の神仏は次第に‘自分に働きかける宇宙的でありながら人格的なもの、母性的なもの’に変わっていったのではないだろうか。

幼少の頃、母はいつも高木に「神仏は我等に常に添ふて居られる、人が居ないからと思ふて悪事をしてても神仏は傍からちゃんと眺めて御居りなさるから始終表も裏も同じように努めねばならない」と教えていたというが、臨終の折にはひょっとしたらこれに近い人格神が彼と一体になっていたのではないだろうか。そして次第に混濁する意識のなかで、母性的な神の温もりを全身で感じていたのではないかと思うのである。